

保育の研究について

岡田 正章

「乳幼児保育の諸問題に関する研究者、幼稚園、保育所等において、実際保育に従事しつつその理論的基礎を求めているもの、一般に乳幼児の問題に深い感心をもち、子どものたくましい発達をこいねがう人々は、それぞれの立場から、この学会に会員として参加し、学会の目的（筆者注・乳幼児を心身ともに健やかに育成するためには、子どもに対する深い愛情とともにその保育に科学的な基礎をもたせなければならぬ）。この保育についての科学的・理論的研究を深め、また、保育の研究に関係のある個人

及び団体の連絡を図り、もって保育事業の進歩に貢献する」とするところに協力することを強く希望する次第である」

この文章は、昭和二三年一月二日、日本保育学会が発足するにあたり、学会の趣旨を明らかにするよう示された学会趣意書のなかのものである。

発足時の学会々長は、本誌「幼児の教育」の編集主幹を長年にわたってなさっていた、当時の東京女子高等師範学校教授・附属幼稚園主事（現在の園長）倉橋惣三先生であった。倉橋先生の後に山下俊郎先生が、会長をなさり、その後、平成三年五月まで荘司雅子先生が会長をなさり、日本保育学会を今の姿にまで発展させてこられた。

平成三年五月、第四十四回大会開催にあたって、私が荘司先生の勇退ということで選出され、四人目の日本保育学会会長に選出された。発足当時と異なり、幼稚園は、園数一五二九園、園児数一九万八九

四六人、教員数七〇一九人から、今日では園数一万五〇四〇園、園児数一九七万七五八〇人、教員数一〇万一五〇二人となっている。また、保育所は、園数一七八七園、園児数一五万八九〇四人から、今日では園数二万二七〇四園、園児数二〇〇万七九六四人、保母数一七万九五七七人となっている。大変な増大である。大学・短期大学・保母養成所などで保育の研究にあたっている研究者も非常に多くの数となっている。

これらの方々が、それぞれの立場に限られるのではなく、相互に理論的研究と実践的研究とを交流し、また、ともすれば幼稚園と保育所のひとたちが行政のわくにとらわれて常に分離されている制約を越えて交流し、その研究成果を豊かなものとするのが、日本保育学会の他の組織にみられない大きな特色となっている。

現在会員となっている約三〇〇〇人の方たちもこ

れら三つの立場の方たちで、年一回開かれる研究発表の大会でその真価が発揮されているが、今後は一層その特色が充実したものとなることを期待したい。

研究大会での研究発表も、昭和二三年の第一回では一二件であったが、昭和四四年の第二回で二〇件を越え、昭和五二年の第三〇回で二〇〇件を越え、昭和五七年の第三五回で三〇〇件を越え、昨年の第四四回では三六三件が発表された。大変な発展である。

これからも、役員の皆さんの協力をいただきながら、日本保育学会が国内・国際の両面において保育事業の発展に寄与し、会員の研究が一層深まるよう微力をつくしたい。また、心ある方たちが新たに会員となって、自らの研究を開拓されるようになることを望みたい。

(明星大学)